

C. S. ルイスのキリスト教的ヴィジョンの特質

—*The Pilgrim's Regress* における聖職者たち—

櫻井 直美

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Christian World of C. S. Lewis

—Three Clergymen of *The Pilgrim's Regress*—

SAKURAI Naomi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

C. S. Lewis is well known as the author of *The Chronicles of Narnia*. He also wrote, as a Christian apologist, *Mere Christianity* which is considered to be the most convincing defense of Christianity in the 20th century. Although C. S. Lewis was a popular Christian apologist, his path to Christianity was a long one with many twists and turns. He went from realism to idealism; from idealism to pantheism; from pantheism to theism; and from theism to Christianity.

The Pilgrim's Regress is the first work that Lewis published after he accepted Christianity. He describes his path to Christianity in an allegorical way so that we can see the unmistakable struggles in his mind. There are three clergymen in the story. Through analyzing Lewis's critical representation of these clergymen, I have found that for Lewis the moral norm is based upon "mere Christianity".

1. はじめに

C. S. ルイス (Clive Staples Lewis, 1898-1963) はベルファスト生まれのイギリスの中世・ルネサンス学者、ファンタジー作家、文学批評家、キリスト教弁証家として知られている。著作は物語、詩集、神学・倫理論文集、文明批評など多岐にわたり、とりわけ『ナルニア国年代記物語』(*The Chronicles of Narnia*, 1950-56) 全7巻は有名で、その第7巻の『さいごの戦い』(*The Last Battle*, 1956)は1957年にカーネギー賞を受賞している。

またルイスはキリスト教の教義を明快に説き、その平易な解説で多くの人々をキリスト教信仰へと導いた『キリスト教の精髓』(*Mere Christianity*, 1952)の著者でもある。この著作の発表に際して、ルイスは自身の伝えようとするキリスト教が或る特定の教派に傾いていないかを確認するために、英国国教会派(Anglican)、メソジスト(Methodist)、長老派(Presbyterian)、ローマ・カトリック(Roman Catholic)の四人の聖職者に原稿を送り批判を求めた。その結

果、ルイスは概ね自身とその四人の意見は一致していることを確認した。だが、彼自身のキリスト教との関わりは平坦なものではなく、キリスト教(Christianity)の棄教、現実主義(Popular Realism)、哲学的な観念論(Philosophical Idealism)、汎神論(Pantheism)、有神論(Theism)を経て1931年、32歳の時に回心に至るという特異な経緯を持つ。キリスト教を棄て長年キリスト教に反駁した後、再び受け入れたルイスは独自のキリスト教観を持ち、それを〈混じり気のないキリスト教[mere Christianity]〉と呼ぶ。この言葉は17世紀のイギリス人神学者リチャード・バクスター(Richard Baxter, 1615-91)に依拠しており¹、それは宗派を超え、教会史上において正統とされた教義を基盤とするキリスト教のことである。

ルイスは生涯をかけ様々な文学形式による作品を通して、〈混じり気のないキリスト教〉を基盤とする

¹ C. S. Lewis, *Mere Christianity*, Harper Collins, 1996, preface xiv.

ヴィジョンを提示してきた。その第一作目となるのが『天路逆程』² (*The Pilgrim's Regress*, 1933)であり、ルイスが紆余曲折を経てようやくキリスト教を再受容した後、初めて発表した作品である。『天路逆程』は、ルイスの思想遍歴が夢物語としてアレゴリー形式で語られており、ルイスのキリスト教に対する反駁の歴史、そして遂にキリスト教を再受容する過程がアレゴリー全体を通して提示されている。当該作品には様々な思想を表す多くの人物が登場する。その中には三人の聖職者が含まれる。主人公ジョン(John)が初めて出会う聖職者スチュワード(Steward)、北に住む聖職者ネオ・アングラー氏(Mr. Neo-Angular)、南に住む聖職者ブロード氏(Mr. Broad)の三人である。本論考ではこれら三人の聖職者に着目し考察することにより、作品に盛り込まれたルイスの聖職者批判を検討する。

2. 『天路逆程』のプロット

夢物語はつぎのように始まる——「私はピューリタニアの国で生まれたある少年の夢を見た。その子の名前はジョン(John)という。」ジョンは幼い頃の或る日に、家の料理人から禁止事項があるということを知えられた。その一年後、ある陰鬱な寒い朝、ジョンは両親に連れられてその地区のスチュワード(Steward)³の所へ行った。そこでスチュワードに教えられた話を聞いてジョンは困惑する。ランドロード(Landlord)⁴は愛深き人であると同時に、禁止事項を破った者を蛇やサソリの蔓延るブラック・ホール(Black hole)⁵へ投げ込む人であると教えられたからである。マスクを付けたスチュワードはジョンに禁

止事項を破ってはいけないと教え、マスクを外したスチュワードは禁止事項を厳密に守る必要はないと言った。ジョンはその矛盾に困惑し、とにかくランドロードには近づかないほうが得策だと考える。

その後しばらく時が経過したある日のこと、ジョンは家から遠く離れた道で美しい音楽を耳にし、時おり遠くに穏やかな海と魅惑的な島を見る。その島への憧れが日に日に募り、とうとうその島を探し求める旅に出る。

旅に出た次の朝、ジョンはエンライトメント氏(Mr. Enlightenment)に出会う。彼は現実社会や科学について話し、ランドロードやブラック・ホールはスチュワードの作り話で存在しないとジョンに説明する。それを聞いたジョンは安堵と喜びで晴れ晴れとした気持ちになる。

次に出会ったのは、旅の道連れとなるヴァーチャー(Mr. Vertue)である。彼はこれといった目的もなく毎日西へ30マイル進むという自身に課した規則を忠実に守っている。二人はしばらく南北を分断する本道(Main Road)を西へ向かっていたが、ジョンはヴァーチャーと別れて南北を彷徨う。

憧れの島を見つけられずに本道に戻ったジョンはヴァーチャーに再会する。しかし二人の本道を進む旅は大渓谷に阻まれる。大渓谷を渡る道を求めて北へ向かった二人は三兄弟ペール・メン(Pale Men)の小屋に立ち寄る。その一人が聖職者のネオ・アングラー氏(Mr. Neo-Angular)である。ペール・メンの食事は極端に貧しく、ネオ・アングラー氏は自身の貧しい食事をジョンとヴァーチャーに分け与えたが、その善行は義務であるという理由で行われる。ジョンの憧れの島のことを聞くと、そのような意味のないものを求めるのは止めるようにジョンに促す。

極寒の北の果てまで行き、渡る道がないと分かると、ジョンとヴァーチャーは本道に戻り今度は暖かな南へ向かう。そこで出会う聖職者がブロード氏(Mr. Broad)である。暖かな芝生で物腰の柔らかいブロード氏はジョンとヴァーチャーにたっぷりの食事を提供する。ジョンの憧れの島については、性急に探さなくともよいのではないかと助言する。

ブロード氏の家を後にしたジョンとヴァーチャー

² *The Pilgrim's Regress* は明らかにジョン・バニヤンの *The Pilgrim's Progress* を意識して書かれたものである。*The Pilgrim's Progress* の邦訳が『天路歷程』とされていることから本論考では *The Pilgrim's Regress* を『天路逆程』とする。『天路退行』、もしくは『天路逆行』とする先行研究者もいるが、旅に出た主人公が〈憧れ〉の対象を求めて故郷に戻ることから本論考では『天路逆程』を使用する。

³ 聖職者を表す。

⁴ キリスト教の神を表す。

⁵ 地獄を表す。

は、マザー・カーク(Mother Kirk)⁶の力を借りて大溪谷を渡る。溪谷を渡ったジョンは憧れの島を目の当たりにする。それは想像を絶する美しさで、なんと彼が島だと思っていたのは生まれ故郷ピューリタニアの東の山であった。心の満たされたジョンはガイド(The Guide)に導かれて帰途に着くが、戻り道は別世界のように輝き、歓びに包まれていた。ジョンは島に対する憧れは実はランドロードへの憧れであったが、それを知らずに暗中模索していたことが分かる。ジョンとヴァーチャーは楽しげに歌を歌いながら川を渡り、故郷のランドロードの御許に辿り着く。そして物語の語り手である私は夢から覚める。

3. 〈混じり気のないキリスト教〉(Mere Christianity)

ルイスは神学・倫理論文集において彼独自のキリスト教観を示している。それを〈混じり気のないキリスト教〉と呼び、宗派を超えたキリスト教の本質を伝えようとしている。〈混じり気のないキリスト教〉はルイスが長年キリスト教に反駁した経験を通してようやく受け入れたキリスト教である。ルイス研究の権威であるキルビー教授によれば、ルイスは自身を次のように言ったと述べている。

a “converted pagan living among apostate Puritans” and a man who had taken as long to acquire inhibitions as others have needed to get rid of them.⁷

ルイスは『キリスト教の精髓』の序文において神学的論争や教会史の問題はキリスト教の外側にいる人々をキリスト教から遠ざける問題であると記し、自身は宗派間を超えたキリスト教の本質を説きあかしたいと決意し、自身の説く〈混じり気のないキリスト教〉を次のように記している。

the belief that has been common to nearly all Christians at all times.⁸

⁶ 教会を表す。

⁷ Clyde S. Kilby, *The Christian World of C. S. Lewis*, Wm. B. Eerdmans, 1964, p.13

⁸ C. S. Lewis, *Mere Christianity*, Harper Collins, 1996, preface.xiii.

‘mere’ Christianity, which is what it is and what it was long before I was born and whether I like it or not.⁹

つまり、天地創造、人間の墮落、キリストの受肉、十字架による贖罪、肉体の復活、奇跡、再臨、裁き、全自然の終末的贖い、天使、悪魔、天国、地獄を事実として信じる昔ながらのキリスト教である。¹⁰

これに対して、キリスト教の本質に真摯に向き合わずに、場面に合わせてしばしば立脚点を変えようとする信仰を、ルイスは水で薄めたようなキリスト教だと批判し、それを〈水割りのキリスト教〉(Christianity-and-water)と呼び、こう記している。

the view which simply says there is a good God in Heaven and everything is all right—leaving out all the difficult and terrible doctrines about sin and hell and the devil, and the redemption.¹¹

4. 三人の聖職者たち

4.1 The Steward

ピューリタニアの国に住む幼いジョンは、ある日庭にいた小鳥をパチンコで撃とうとして家の料理人に咎められた。その理由を聞くと、そのあたりの国の規則を作る人、スチュワードが禁止しているからだ教えられる。その一年後にジョンは両親に連れられてスチュワードの住む道路脇の暗い石造りの家へ行き、彼に初めて面会した。赤い丸顔のスチュワードは親しみを込めてジョンに話しかけるが、ジョンの緊張が解れかけた時に、突然恐ろしいマスクを付けてランドロードについて話し始める。

Now I am going to talk to you about the Landlord. The landlord owns all the country, and it is very, very kind of him to allow us to live on it all—very, very kind.¹²

⁹ *ibid.* preface xv.

¹⁰ 柳生直行、『お伽の国の神学』、新教出版社、1984年、p.110 参照。

¹¹ C. S. Lewis, *Mere Christianity*, Harper Collins, 1996, p.67.

¹² C. S. Lewis, *The Pilgrim's Regress*, Collins, 1987, p.30. 以下、本テキストからの引用はページ数のみを記す。

スチュワードは‘very kind’と言う個所を歌うように長く伸ばしながら強調し、ランドロードはとても親切だと述べる。その後、声音が一変して壁にかかったカードを見せながら、そこに書かれた規則を破った場合ランドロードが与える罰を説きジョンを脅えさせる。

He'd take you and shut you up for ever and ever in a black hole full of snakes and scorpions as large as lobsters—for ever and ever.(30)

スチュワードはマスクを外すとジョンにそのカードとケーキを手渡して、自分だったらそこに書かれた規則を気にし過ぎることはないと言いつける。ここに表される聖職者の偽善的な行為はジョンを混乱させている。マスクを付けた時は信仰の教義を厳粛な面差しで伝え、マスクを外した時は理解者として親しみを込めてほだほだにすればよいと伝える。ここに提示される聖職者は信徒のよき理解者であろうとするためにとる偽善的な行為によってむしろ信徒に混乱を与えるのである。このような二つの顔を持つ聖職者は決して神の愛を伝えることはできない。神はとても親切だとその愛を伝えようとしているが、〈べからず〉を強調し、さらに地獄の恐ろしい描写によって脅しの信仰になっている。脅しの信仰からはキリスト教に内在する歓びや恵みがもたらされることはないであろう。

ある日、ジョンの年老いた伯父がランドロードの御許へ逝くときを迎えた。マスクを着けたスチュワードは、震え慄く伯父に、ランドロードの城へ行き、門を叩けばここよりもっと住み心地の良いところへ連れて行ってくれと伝える。伯父をランドロードの城の近くまで見送った後、スチュワードはマスクを外した。彼は伯父を見送ったときの厳粛さとは一変して、ジョンの両親と伯父の残した豚をどうするかという俗物的な話を始める。

マスクの着脱によって態度を変える聖職者が伝えるキリスト教は、水で薄めたようなキリスト教であり、キリスト教信仰の本質は決して相手に伝わるこ

とはない。ルイスの後の作品『悪魔の手紙』(*The Screwtape Letters*, 1942)にも同様の牧師が登場している。その牧師は信徒が教義を受け入れやすいように長年にわたり信仰を水増しする。つまり信徒に楽をさせるという理由から自分の気に行った少しばかりの聖句を何度も繰り返すばかりである。

a man who has been so long engaged in watering down the faith to make it easier for a supposedly incredulous and hard-headed congregation ... In order to spare the laity all ‘difficulties’ he has deserted both the lectionary and the appointed psalms¹³

このようにルイスは本音と建前がある偽善的な方法で示されるキリスト教、つまり立脚点を場面に合わせて変えてしまう〈水割りのキリスト教〉は、決してその本質が伝わらないことを示している。

ジョンはスチュワードの話からランドロードには近づかないのが得策だと考える。そして彼の憧れの島を見つけるためにピューリタニアの国を後ににする。

4.2 北と南の特徴

本作品にはジョンが辿った道を示す地図が含まれている。地図の中央に南北を分断する真直ぐな道が描かれており、これを本道として旅が続けられる。ジョンが辿った道は本道から大きく逸れているが、その北側と南側にはそれぞれ大きな特徴を示している。ルイスはこの作品の序文で以下のように述べている。

The Northerners are the men of rigid systems whether sceptical (ママ) or dogmatic, Aristocrats, Stoics, Pharisees, Rigorists, signed and sealed members of highly organized ‘Parties’.

The Southerners are by their very nature less definable; boneless souls whose doors stand open day and night to almost every visitant, but always with

¹³ C. S. Lewis, *The Screwtape Letters*, Harper San Francisco, 2000, p.82-3.

readiest welcome for those, whether Maenad or Mystagogue, who offer some sort of intoxication.¹⁴

さらに序文では神学におけるその北と南に描かれた特徴について言及されている。ルイスは北に位置付ける神学者としてカール・バルト(Karl Barth 1886-1968)をあげている。バルトは新正統主義(Neo-orthodoxy)を広め、自由神学主義(Liberal)を批判した。バルトが批判した内在主義と楽観主義の強い自由神学主義を掲げるのが南の特徴である。南に位置付けられる神学者はデジデリウス・エラスムス(Desiderius Erasmus 1467-1536)である。

Barth might well have been placed among my Pale Men, and Erasmus might have found himself at home with Mr. Broad. (18)

北と南を象徴する聖職者として作品中にネオ・アンギュラー氏(Mr. Neo-Angular)とブロード氏(Mr. Broad)が登場する。

4.3 Mr. Neo-Angular

センシブル氏の家を後にしたジョン、ヴァーチュエ、ドラッジは道沿いに小さな小屋を見つける。そこにはとても痩せて青白い三人兄弟(Pale Men)が住んでいた。三人はそれぞれ違う思想を持っているが反ロマン主義であるという一点により固い絆で結ばれている。その一人が聖職者ネオ・アンギュラー氏である。ネオ・アンギュラー氏はほんの少しの貧しい食事をその義務感からジョンたちに分け与える。疲労のため旅を続けるのが困難なジョンを、自分たちの食べるものにも事欠く小屋にしばらく留まらせる。そのことも自身が聖職者として規律に従って行動する義務があるという理由からである。そこには慈愛が見られない。

the secular virtue of hospitality was worthless, and care for the afflicted a sin if it proceeded from humanitarian sentiment, but that he was obliged to act as he did by the rules of his order.(128)

ジョンの憧れの島の話を知ると、そのようなロマン的な戯言は心から消し去るように勧める。ジョンがマザー・カークに聞いたアダムの罪(Peccatum Adae)の話をする、そういう話は資格のある聖職者から聞くべきだと力説する。またネオ・アンギュラー氏はリーズンと会ったというジョンに、彼女のことも先人達がまとめた教えから学ぶべきであると述べる。

So you have met Mother Kirk? No wonder that you are confused. You had no business to talk to her except through a qualified Steward, ... Reason is divine. But how should you understand her? You are a beginner. For you, the only safe commerce with reason is to learn from your superiors the dogmata in which her deliverance have been codified for general use. (130)

A.N. ウィルソンによれば、この言葉はほとんど一言半句の省略もなしに T. S. エリオットのエッセイやイヴリン・ウォーの手紙から引用されている。¹⁵ ネオ・アンギュラー氏はまだ見たことがないものをすでに見通しているかのように語るのだ。これに対してジョンは猛烈に反抗する。

there is at least one object in the world of which I know more than you. I have *tasted* what you call romantic trash; you have only talked about it. ... I know this by experience as I know a dozen things about it of which you betray your ignorance as often as you speak.(130)

このジョンの反抗はルイスが序文でどうしても我慢ならない人々と述べている批判の言葉と符合して

¹⁴ C. S. Lewis, *The Pilgrim's Regress—An Allegorical Apology for Christianity, Reason and Romanticism*, Collins, Seventh impression 1987, p9-21 参照。

¹⁵ A. N. Wilson, C. S. Lewis : *A Biography*, Norton, 1990, p.134.

いる。

what put me out of patience was the scorn which claimed to be from above, and which was voiced by the American ‘Humanists’, the ‘Neo-Scholastics, and some who write for *The Criterion*. These people seemed to me to be condemning what they did not understand. When they called Romanticism ‘nostalgia’ I, who had rejected long ago the illusion that the desired object was in the past, felt that they had not even crossed the *Pons Asinorum*. In the end I lost my temper.(16)

ルイスが我慢ならないクライテリオン(*The Criterion*)への投稿者達と記す文芸雑誌は T. S. エリオット (T. S. Eliot, 1888-1965) によって 1922 年に創刊された。アメリカ生まれのエリオットは 1927 年イギリスに帰化しアングロ・カトリシズム (Anglo-Catholicism) を標榜する詩人・批評家である。ネオ・アンギュラー氏の名前はアングロ・カトリシズムをほのめかしており、ここでは明らかに T. S. エリオットを表し批判している。¹⁶

ネオ・アンギュラー氏は自身が理解していないことを非難しており、その思想は岩のごとく不毛である。このことは彼らの食事の極端な貧しさと、作物を何も生み出さぬ荒れ庭とによって象徴されている。資格のある聖職者の話、先人達がまとめた教えを奨励するネオ・アンギュラー氏に対して、ジョンは激しく反抗してそこを立ち去る。ルイスは一人の人間と神との関係こそ人生最大のロマンであるという反駁をここに込めている。

4.4 Mr. Broad

ペール・メン達に別れを告げたジョンとヴァーチューは北を後にして本道を超え、今度は南へ向かった。本道から 1 マイルほど南の所にブロード氏の家があった。彼は年のころ 60 位の物腰の柔らかな聖職者であったが、ピューリタニアのスチュワードのよ

うにマスクはしていなかった。彼の妻のマルタ (Martha) はかいがいしく彼らをもてなす。マルタの様子は『聖書』ルカによる福音書 10:38-42 に登場するベタニアのマリアの姉を思わせる。マルタはイエスが家に訪れた時にかいがいしくイエスをもてなすことに精を出し、それを手伝わないマリアを咎める。イエスはそんなマルタに妹のマリアのように自分の教えに耳を傾けるようにと諭すという箇所である。芝生の庭でマルタが準備したお茶を飲みながらブロード氏は自分の考えを次のように語る。

as I grow older I am inclined to set less and less store by mere orthodoxy. So often the orthodox view means the lifeless view, the barren formula. I am coming to look more and more at the language of the heart. Logic and definition divide us: it is those things which draw us together that I now value most — our common affections, our common struggle towards light. (150)

ブロード氏はほんの短い会話の中に dear という言葉を 8 回も使用し、splendidly, delightful, love といった言葉も多く使用して親愛と物分かりの良さを表している。ルイスはブロード氏が登場する Book Seven, Chapter 5 の冒頭に作品出版の 10 年後に次のような注釈を付記している。

John meets Broad Church, modernizing,
‘religion’—It is friends with the World and goes on
no pilgrimage—It is found of wildflowers (148)

キャサリン・リンズクークの指摘によると、この注釈はウィリアム・ブレイク (William Blake 1757 - 1827) の『無心のまえぶれ』*Auguries of Innocence* を読者に暗示している。¹⁷

To see a world in a Grain of Sand
And a Heaven in a Wild Flower
Hold Infinity in the palm of your hand

¹⁶ Chad Walsh, *The Literary Legacy of C. S. Lewis*, Harcourt Brace Jovanovich. 1971, p.68.

¹⁷ Kathryn Lindskoog, *Finding the Landlord*, Cornerstone Press, 1995, p.72.

And Eternity in an hour¹⁸

ブロード氏はジョンに困難な憧れの島を探す旅を続けるよりも、美しい自然の中に天国を見つけることを勧める。また彼はネオ・アンギュラー氏にも会ったことがあると述べ、彼は愛すべき良い友達であるが、彼の思想はちょっとばかり視野が狭く流行遅れだとし、寛容な広い心を持つ自由主義を強調している。

ブロード氏のマザー・カークに対する見解は特筆すべきものである。

‘Ah, Mother Kirk! I love and honour her from the bottom of my heart, but I trust that loving her does not mean being blind to her faults. We are none of us infallible. If I sometimes feel that I must differ from her at present, it is because I honour all the more the idea that she stands for, the thing she may yet become. For the moment, there is no denying that she has let herself get a little out of date.’(151)

ブロード氏はキリスト教の解釈は時代に沿って見直されるべきだとし、マザー・カークの代表する〈観念〉に敬意を表しているが意見を異にすると述べる。そして彼女は少々時代遅れでもっと受け入れやすい真実があるはずだと論じる。

ルイスはこのような自由主義的な神学的見解を持った聖職者を他の作品にも登場させている。『天国と地獄の離婚』(*The Great Divorce*, 1946)に登場する英国教会の聖職者である。¹⁹ 彼は天国の縁までやってきながら、斬新で注目を集められる神学論文(イエスがもう少し長生きしたらもっと成熟していたとの学説)を発表するために地獄に戻る。ルイスはこのように流行の神学を追い求める姿勢に作品を通して厳しい批判を加えている。

ジョンはブロード氏の非常に曖昧な憧れの島に対する見解からは何も得るものがないと、彼の家を後

にする。

5. おわりに

ジョンの憧れの島を探し求める旅を描いた『天路逆程』は、憧れが遂にはキリスト教の神の受容によって満たされるという物語展開になっている。ルイスはジョンが出会った三人の聖職者たちを通して独自のキリスト教観を明確に示している。

ジョンが生まれ故郷で初めて出会ったスチュワードは、一般的な地区の牧師を表しており、見せかけの良い理解者然とした態度は神の愛を伝えるどころか混乱を引き起こすことが明示されている。このことはルイスが決して〈水割りのキリスト教〉を受け入れないことを示唆している。北の聖職者ネオ・アンギュラー氏の、狭義な先験的根拠にもとづく弁証法神学に対しては、まったく実りのない不毛な思想であるというルイスの見解が現れている。南の聖職者ブロード氏の時代に合わせて神学の流行を追い求める傾向は、楽観主義や汎神論を信仰と取り違えてしまうという警告が含まれている。

ルイスは自身がキリスト教を再受容して初めて発表した『天路逆程』を通して、自身の受け入れた〈混じり気のないキリスト教〉をなによりも擁護している。言い換えれば、三人の聖職者たちを通して自由主義的キリスト教、とりわけ〈水割りのキリスト教〉に対する痛烈な批判を盛り込んでいたといえよう。その意味で、『天路逆程』は20世紀の西欧における偉大なキリスト教弁証家としてのルイスの出現を準備した重要な契機であると言ってさしつかえないであろう。

(Received: September 30, 2010)

(Issued in internet Edition: November 1, 2010)

¹⁸ Kathryn Lindskoog, *Finding the Landlord*, Cornerstone Press, 1995, p. 72.

¹⁹ C. S. Lewis, *The Great Divorce*, Harper Collins, 2002, Chapter 5.